書　評　麻布大学雑誌　第 32 巻　33 － 37

渡辺茂『動物に「心」は必要か』

Shigeru WATANABE 2019. *Do We Need 'Mind' to Unerstand Animal Behavior?*

小畑　嘉丈

麻布大学獣医学部非常勤講師

Yoshitake OBATA

A Part-Time Lecturer, Azabu University

Abstract: The author criticizes anthropomorphism and argues that romanticism is its root. It allows more explanation than anthropomorphism is the default of social animal thinking, but also makes criticism of anthropomorphism difficult.
Keywords: psychology, animal psychology, anthropomorphism, romanticism

はじめに

「擬人主義は誤りだ」などということについては、一見議論の余地がないように思われるが、本書は擬人主義批判を通じて、事はそう単純ではないことを明らかにしている。

擬人化とは、言うまでもなく比喩であり、そうである以上、文学的な描写ならばさておき、論理的な考察においてはやってはならないことであることは当然のことのように思われる。しかし、筆者の語る心理学の歴史によれば、擬人主義が繰り返し立ち現れてしまうことは必然であるようにも思われる。動物心理学にとって擬人主義が極めて逃れがたいものであることが逆説的に表れているのが、本書冒頭の一文「やはり、とどめをさすべきだったのだと思う。ヘビの頭を石で叩きつぶすように」[1)]であろう。

責任著者：小畑　嘉丈 (e-mail: obata@azabu-u.ac.jp)

本書の概要

本書の題名は『動物に「心」は必要か』だが[2)]、その内容は大部分が心理学史である。詳細に言えば、序章から第 11 章までが心理学史であり、第 12 章から終章に当たる第 16 章までが、本論及び補論である。筆者の言葉を借りて、更に細かく構成を説明すると、「冒頭の三章（序章・第 1・2 章）は擬人主義を中心にして近代の「心」という考え方が定着するまでの史的展望」[3)]であり、第 3 ～ 6 章は「進化論に関する章」[4)]、第 7 ～ 11 章は「近代の意識心理学の成立から行動主義の登場までの概説」[5)]、第 12 ～ 14 章が本論に当たる擬人主義批判、第 15 章は「心理学の外に出て」[6)]、「哲学者たちの動物観を概観」[7)]した章、第 16 章は動物に加えて機械との共生についても考察しており、学術論文における「今後の課題と展望」に当たる章であろう。

心理学史を語って動物が主題となる所以は、心理学の実験には動物が多用されたからである。筆者によれば、「行動主義全盛の時代の米国の心理学研究室のイメージは、スキナー箱と累積記録器がずらりと

並んだものである」[8]とのことだ。「スキナー箱」とは、「実験者と動物の接触を遮断」[9]するための実験器具であり、「実験者と実験動物の切り離しの重要性は、強調してし過ぎることはない」[10]とされる。実験者と実験動物を切り離さなかったために生じた誤謬の広く知られた例が「賢いハンス」であり、心理学史上の重要な事例として本書でも紹介されている[11]。

動物心理学に「擬人主義の呪い」がかかってしまった発端は、本書によればダーウィンにあるように見える。それ以前に心理学における動物観に強い影響力を有していたのは「ヒトと動物を峻別する」[12]デカルト主義であり、それが基本的な認識であれば「人間が特別でほかの動物たちと違う」[13]のだから、擬人主義は生じなかったかもしれない。しかし、ダーウィンが進化論によって人間と動物の連続性の扉を開いてしまったことにより、同時に擬人主義も心理学に忍び寄ってくることになったようだ[14]。ダーウィンとデカルト主義者の「戦い」について、筆者は「敵の塹壕を抜くたびに、空になった塹壕には、擬人主義という毒が撒かれていたのである。そして、勝ち進めば進むほど、勇敢なる兵士の体にその毒は蓄積されていった。それと気づかぬうちに」[15]と述べている。ダーウィンはデカルト主義を相手として戦ったのであって、擬人主義のために戦ったのではなかったが、しかし人間と動物の連続性を唱えるならば、思考のなかに人間から動物への推論は入り込んできやすくなる。筆者はダーウィンの擬人主義の例としてクジャクの尾羽を挙げている。「動物の美しさの典型例として取り上げられるクジャクの尾羽は、ダーウィンの悪夢だったといわれる」[16]というが、「どうもなんの役に立っているのか首をかしげたくなるもの」[17]という難問の説明として、ダーウィンは「メスの審美眼」という擬人主義を持ち出してしまった。この「性選択をめぐる議論」は「非科学的理論として忘れられ」たが[18]、擬人主義そのものは消え去らなかった。

心理学の方法は長く「内観」だったが、実験心理学の創設者であるヴントはこれを精緻化して「自己観察」を方法とした[19]。更にワトソンは内観批判から出発して「行動主義宣言」を行った[20]。同宣言のなかには「行動主義者は、動物の反応の統一的研究方法を得ようとしており、人間と動物との間に区別を設けることを認めない」[21]という一文があり、「行動主義は主たる研究方法として動物実験を用いた」[22]。つまり、動物実験から人間の行動のメカニズムも理解できるという立場なので、擬人主義とは正反対の「擬鼠主義」が生じたことになる。こうなると心理学から擬人主義は放逐されたようにも思われるが、行動主義の衰退と共に擬人主義が回帰してしまう。「行動主義の凋落を招いた大きな要因は、認知革命だったとされる」[23]が、これによって生まれた認知心理学と擬人主義との関係は複雑である。筆者によれば「認知心理学はヒトという特別な実行器の間主観性に基礎を置く（中略）認知心理学はヒトと動物に境界を作る。つまり、デカルト主義者なのだ」[24]という。「間主観性」とは、「共同主観」と言い換えられることもあるが、ここでは言語を介して他者の主観を取り込んだ主観のことであり、それを基礎にして動物を観察するということであろう[25]。デカルト主義に回帰するなら、擬人主義でないという点では行動主義と変わらないように思われるが、実際にはそうではなかった。意外な感じもするが、一因としては、行動主義が持ち込んだ、ヒトと動物を統一的に捉える一般理論への道を、認知心理学も放棄しなかったのだろうか。ヒトの間主観性に基づいて動物を捉えようとすれば、それは擬人主義にならざるを得ないだろう。また、筆者は「ロマネス―ウォシュバーンとつながる動物の主観的世界への興味は、連綿として続いていたと思われる（第6章参照）。行動主義はそれを抑圧していたに過ぎない。行動主義がその勢力を失った時、再び「動物の心」への関心が立ち上がってきたと見るべきだ」[26]と述べる。ここで本書の題名が意味を帯びてくる。認知心理学と関係なく、人間は「人に心があるように、動物にも心がある」と考えてしまう傾向があるということだ。それは言うまでもなく擬人主義だが、筆者はなぜ人が擬人主義をとってしまうのかについて、それが「ヒトの思考様式のデフォルト」[27]であるという以上の説明を試みている。それがロマン主義である。心理学の書物の終わりにロマン主義が出てくるのはやや意外な展開であり、筆者自身も「むやみに深く考えすぎだという批判はあるだろう」[28]と述べているが、これはロマン主義を念頭に置いてのことだろう[29]。

擬人主義―ロマン主義について

ロマン主義批判について、筆者は本書刊行後の新聞でのインタビューでも言及しているので[30]、強調すべきポイントと考えているのは間違いないだろう。筆者のロマン主義理解は、こうである。「ロマン主義は反自由主義、反個人主義、反理性主義であり、啓蒙期からフランス革命期にかけて形成された機械論的発想と普遍的で平等な個人という抽象的人間観に対する抵抗だった」[31]。更にロマン主義の有機体説を取り上げて、「世界を有機体とみなすことは、国家を有機体とみなす全体主義に結びつく」[32]とし、「擬人主義の根源は、まさにこのような自然観に基づいている。ヒトと自然の一体感、ヒトと動物の共感、これらは行動主義が根絶できなかったものである」[33]と述べ、全体主義の具体例としてナチの動物観を取り上げている。ナチと動物については既に研究も存在するが[34]、ナチは動物保護法を制定している。「劣等人種」を殺して動物を保護するのか、という疑問は誰しも抱くものと思うが、筆者はこれについて「ホロコーストを行ったナチは、人間中心主義ではない。人間以外の動物でも、同じ「血と土」に所属する限り、人間と同様に扱われる。逆に、人間でも、同じ血と土とに属さなければ、人間扱いされないという訳だ」[35]と説明している。ナチとドイツ・ロマン主義への考察に続けて日本浪曼主義にも触れているのは、主に日本の読者を想定して、ロマン主義の病が他人事ではないと理解することを求めてのことだろう。なお、心理学の書物においてロマン主義批判を行うのであれば、近代心理学の祖であるヴントの民族心理学をどう評価するのかについても読んでみたかった。個人心理学の他に民族心理学も想定するのは、ロマン主義的な「個人の拡張（或いは個人と民族の一体感）」という発想と結びついているようにも思われる。

この「擬人主義―ロマン主義」説について評者が気になるのは、擬人主義の根源にロマン主義を見出すことで、筆者は擬人主義が「社会的動物はみな擬自種主義をとる」という以上の説明を可能としたが、しかしそのことによって、議論の射程がかえって広がりすぎたのではないか、ということである。筆者は「行動主義は功利主義・商業主義という病根をもっていたとはいえ、よくこれ（ロマン主義的自然観―引用者注）に抗した。が、所詮心理学の中だけでの運動に過ぎなかった。たとえ一時的に勝利を収めたように見えても、それは局地的な勝利であって、擬人的世界観は少しも揺るがず、第11章で述べたように、心理学を含めゆっくりと世界を飲み込みつつある」[36]と述べる。しかしそうだとすると、心理学の外でもロマン主義と戦わなければ、心理学において擬人主義を排するという戦いを貫徹することはできなくなる。学術的な考察を行う際に比喩をやめるべきだ、といった議論はもちろん成り立つものと思う。しかし、ロマン主義は筆者も言うように、非論理的な感情としての「情動」[37]である面がある。研究に情動を持ち込むべきでないということには広く合意が得られるだろうが、それ以外のところで情動を押さえ込むのは至難の業であろう。

また、情動のようなものを合理主義ないし理性主義によって克服することが可能なのか、といった問題がある。既に引用したが、本書の定義によれば、そもそもロマン主義は「反理性主義」である。改めて引用すれば、「ロマン主義は（中略）啓蒙期からフランス革命期にかけて形成された機械論的発想と普遍的で平等な個人という抽象的人間観に対する抵抗だった。初期段階は、フランス啓蒙思想の歴史観や、デカルトのような個人の意識を中心に据えた主観主義哲学に対する反発から生まれた、哲学の運動」[38]である。擬人主義を排するために理性主義を押し立てても、再び抵抗と反発を呼び起こすのみにとどまるのではないか。本書はドイツ・ロマン主義を考察するためにキリスト教文化とゲルマン文化の関係にも触れているが[39]、この関係も示唆的ではないか。キリスト教文化がゲルマン文化を完全に駆逐してしまったわけではなかった。本書で言及されるドイツや日本のような「後進地域」の思想的経験は、普遍主義は反発を呼び起こすことを示している。

動物心理学における擬人化から話を始めて「共同体の擬人的理解」[40]すなわち全体主義にまで議論を展開するのは、話を広げすぎだと感じる読者もいるものと思うが、筆者が第14章の終わりに「自分の実験動物を「この子」と呼ぶような研究者からは、死臭がする。その死臭は、ロマン主義や浪漫主義が結果として生み出した、未曾有の膨大な屍が発する死臭と同根の死臭なのである」[41]と述べていることに注目

したい。「この子」は、少なくとも表現上は家族視していることが窺われるものだが[42]、日本においては全体主義や有機体説は、天皇を頂点とし、「臣民」をその「赤子」とする「家族的国家観」となって表れた。やはり一考に値する指摘であるように思われる。

終わりに
学術面以外における動物の擬人化について

最後に、いささか個人的な事情について触れて結びとしたい。評者は本学で文章表現法の授業を担当しているが、そこでの論文指導において、何度指摘しても動物を擬人化した表現が消えないことに常に難儀しており[43]、本書を手に取ったのは、副題が「擬人主義に立ち向かう」だったからである。評者も、甚だ小さい規模ではあるが、毎年「擬人主義に立ち向か」っているので、何かヒントが得られるのではないかと考えたのだった。

本書は基本的に心理学の書物なので、評者のような関心で読もうとするのは、妙な接近の仕方だったかもしれない。しかし、当初の関心からも興味深い箇所が終わりの方にあった。第16章「動物・機械との共生」の論の運びである。

「動物との共生」も論文指導のなかで頻出する表現であり、動物愛護法の条文をはじめとして、厚生労働省などの動物に関する文書にも頻繁に見られる表現である。しかし、率直に言って安易に使われることが多いと感じる。人間と動物が「共生」するとは、人間社会において他者同士が「共生」することとも[44]、自然界において動物同士が「共生」することとも異なることであるはずである[45]。そうであるならば、「共生」の第三の意味を考えたうえで「共生」の語を用いなければならないが、「人間と動物の共生」という言葉が使われる時に、そうした考察の形跡が見られることは多くない[46]。しかし、本書の行論はさすがに丁寧である。

第16章には動物を人間社会の「メンバー」だとする文が出てくるが、そこでの書き方はこうである。「ヒトとの相互コントロールをしているという意味では、動物も機械も人間社会のメンバーの一員である」[47]。どのような意味で「メンバー」だと言えるのか明示している。では「ヒトとの相互コントロール」とは何か。これも丁寧に論じられている。「社会の構成員の条件は、社会行動の規範を共有することである。動物はヒトの社会規範を押しつけられている（中略）一方、私たちもまた動物からの規範を受け入れる。イヌを散歩に連れ出し、マーキングをさせ、糞は飼い主が持って帰る。糞の持ち帰り以外の行動は、イヌが飼い主を強化しているのである」[48]。「機械やロボットもまた、すでに社会に組み込まれている。単なる道具としての機械から、「たまごっち」以降、効率的に人間の仕事を代替するのではなく、逆にヒトに不必要な労働をさせるロボットが次々と登場している。この行動は、ロボットがヒトに与える社会強化によって維持されている。社会性動物であるヒトは、常に社会強化を渇望している」[49]。ここまで読めば、動物が人間社会の「メンバー」であるとはどのような意味であるか、明らかであろう。「動物との共生」や「動物は人間社会の一員」といった言葉を、人間が「動物を統治・管理」[50]している実態を、単に隠蔽し、糊塗する表現として使い続けるならば、人間と動物の関係についての思考が深まることはないだろう。本書の第16章は、動物を社会的に論じる際の規範を示している。

参考文献

サトウタツヤ・渡邊芳之『心理学・入門〔改訂版〕』2019年，有斐閣
渡辺茂『動物に「心」は必要か　擬人主義に立ち向かう』2019年，東京大学出版会

1) 渡辺，2019: 1
2) 本書は『UP』の連載（2017年1月号～2019年1月号）を書籍化したものだが、連載時の題名は「動物から人を見る」であった。また、本書は比較的くだけた文体で書かれているが、内容は学術的である。これは筆者の文体に加えて、掲載媒体によるものであろう。
3) 渡辺，2019: 242
4) 渡辺，2019: 242
5) 渡辺，2019: 243
6) 渡辺，2019: 208
7) 渡辺，2019: 244
8) 渡辺，2019: 243
9) 渡辺，2019: 149。なお、「スキナー箱」という名称は，考案者のバラス・フレデリック・スキナー（1904～90年）の名前からとられており，筆者はスキナー

を「20 世紀最大の心理学者」（渡辺，2019: 144）と評している。
10) 渡辺，2019: 243
11) 渡辺，2019: 90-98
12) 渡辺，2019: 24
13) 渡辺，2019: 19
14) 意識しなければ，人間に限らず社会性動物は「擬自種主義」をとるようであり，それが人間にとっては擬人主義であることになる。「なにかを自分の種とみなす擬自種主義は，ヒトに限らず広く動物に見られる。イヌのヒトに対する行動には，明らかにほかのイヌに対するような行動が見られる」（渡辺，2019: 174）
15) 渡辺，2019: 46
16) 渡辺，2019: 50
17) 渡辺，2019: 50
18) 渡辺，2019: 50-51
19) 渡辺，2019: 87
20) 渡辺，2019: 116-118
21) 渡辺，2019: 114
22) 渡辺，2019: 127
23) 渡辺，2019: 161
24) 渡辺，2019: 162
25) 本書では間主観性について「人の指摘経験は言語報告として公にされる。その言語はその人の育った言語コミュニティによって形成されたものである。換言すれば，共同体の中で共有される言語・文化随伴性によって形成された，間主観性に基礎づけされている」（渡辺，2019: 163）と説明している。
26) 渡辺，2019: 163
27) 渡辺，2019: 190
28) 渡辺，2019: 243。
29) 先の引用に続けて「怨敵ロマン主義は五尺の小軀の筆者には大きすぎる相手だ」（渡辺，2019: 243）と述べている。
30)『朝日新聞』，2020 年 6 月 2 日朝刊
31) 渡辺，2019: 196
32) 渡辺，2019: 196-197
33) 渡辺，2019: 197
34) 例えばボリア・サックス『ナチスと動物　ペット・スケープゴート・ホロコースト』（2002 年，青土社）など。サックスの名前は本書にも登場する（渡辺，2019: 200）。
35) 渡辺，2019: 198-199
36) 渡辺，2019: 197
37) 渡辺，2019: 205
38) 渡辺，2019: 196
39) 渡辺，2019: 191-195
40) 渡辺，2019: 205
41) 渡辺，2019: 205
42) 或いは、中学生や高校生などが友人などを「この子」と呼ぶ感覚なのだろうか。
43) 日常的な記述のための表現と，学術的ないし論理的な文章の区別についての認識が明確でないため、「それは比喩だ」と指摘されても，何が比喩なのかよくわからない，といった事例が少なくないように思われる。
44) 人間社会の場合，意思を持った人間同士が合意のうえで，或いは「合意がある」というフィクションを設けたうえで「共生」している。それに比べれば動物は一方的に人間社会に巻きこまれている。これらを同じ言葉で表現することには，少なくとも論理的には注意が必要ではないか。
45) 飼い犬と人間，飼い猫と人間の関係は，番犬の役割を務めたり，鼠を捕ったりすることで飼われていたという面に着目すれば，かつては自然界における共生に近かったかもしれない。しかし室内飼いが一般化した現在では言うまでもなく，愛玩動物としての面が強まっている。
46) 行政文書などで安易に使われがちな言葉には他に、「安全・安心」などがある。
47) 渡辺，2019: 237
48) 渡辺，2019: 231。なお，ここでの「強化」は心理学用語であり，「偶然自発したオペラント行動がよい結果が伴うことによって増加すること」（サトウ・渡邊，2019: 182）である。「オペラント」も心理学用語であり，スキナーは動物の行動をレスポンデント（受け身的行動）とオペラント（自発的行動）に分類した。
49) 渡辺，2019: 234
50) 渡辺，2019: 221